

人とアオカナヘビが共存できる街づくりの提案

石田花恋、伊敷杏奈

Project J season4

那覇中学校

1. 目的・動機

season I の調査では、那覇市内でも比較的古い町（首里・弁ヶ岳付近）にはアオカナヘビが生存していることを把握した。また、season II の調査結果の一つに“最後にアオカナヘビを目撃した年代が北部に行くほど若い”という傾向があり、season III の調査結果では、アオカナヘビの生息地が湿潤で動植物が豊富だったのに対し、非生息地では高温・乾燥化が進み、動植物の多様性が著しく劣ることを把握した。

season IV ではこれらを踏まえ、アオカナヘビが生息しやすい環境は人にとっても暮らしやすい環境であるとの仮説を立て、人とアオカナヘビが共存できる町づくりを提案する。

2. 方法・内容

①昭和 20 年と現在の緑が多い順に・国頭村字浜・浦添市安波茶・首里鳥堀町の 3 地点の航空写真を入手し、比較する。これによってまだアオカナヘビがいたと思われる時と現在の相違点や三地点の環境の違いなどを把握し、アオカナヘビの住みやすい環境について考察を深める。

② season I のアンケート結果から、アオカナヘビがいると思われる地域とそうでない地域の公園で公園の利用者と周辺の住人を対象にアンケートを行う。

項目は①この公園周辺でアオカナヘビを見たことはありますか？

②（見た場合）いつ見ましたか？

③この公園にはどのくらいの頻度で訪れますか？

④この公園周辺でマングースを見たことはありますか？

⑤住んでいる場所を大まかに教えてください。

⑥年齢を教えてください。

以上の 6 つで、性別は外見から判断した。

④に関しては、アオカナヘビが減少した原因の一つが外敵マングースによる捕食であるという一説に基づいて設問した。

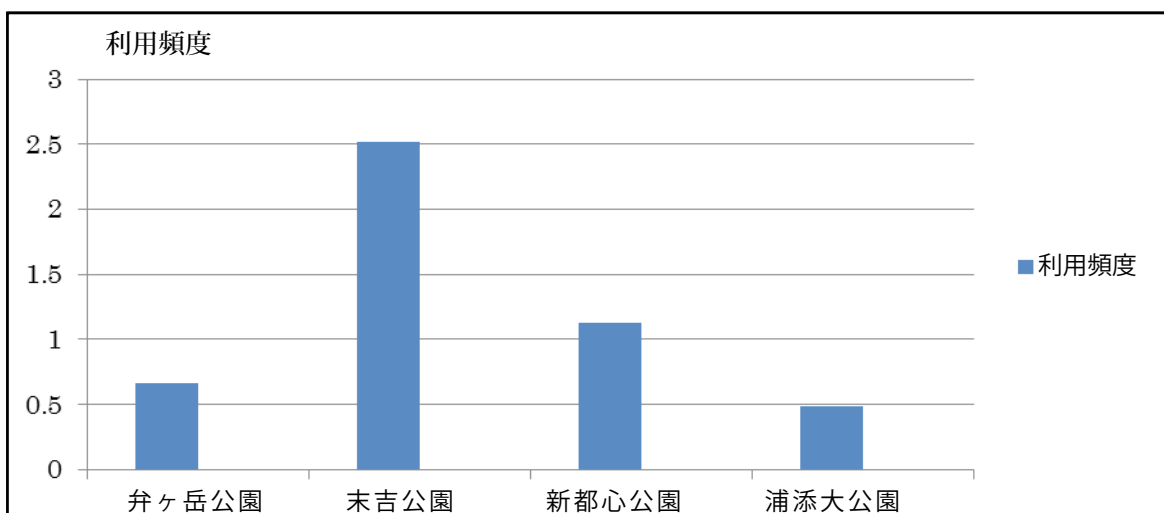
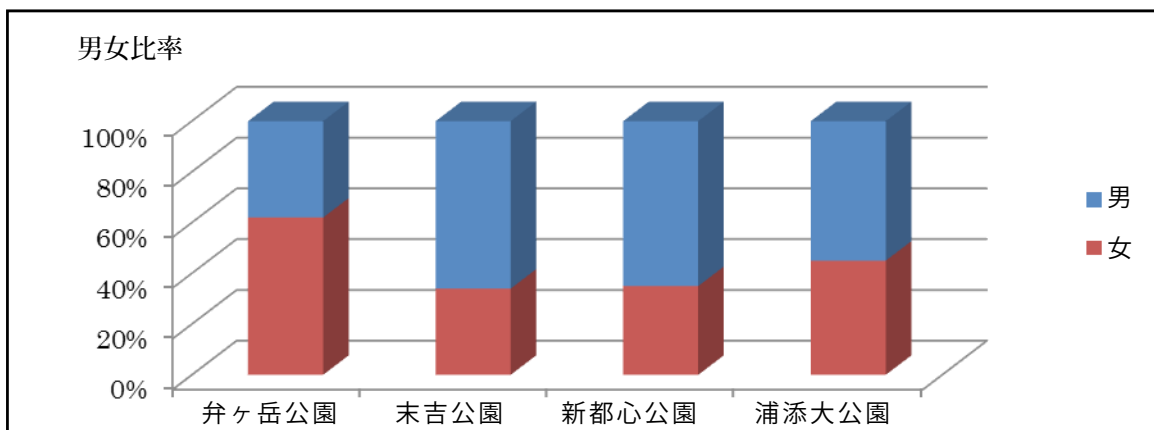
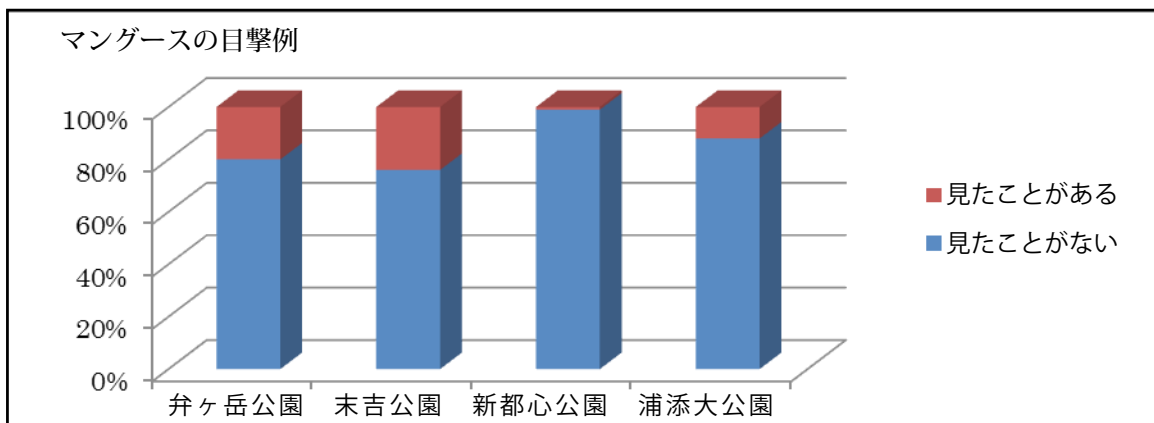
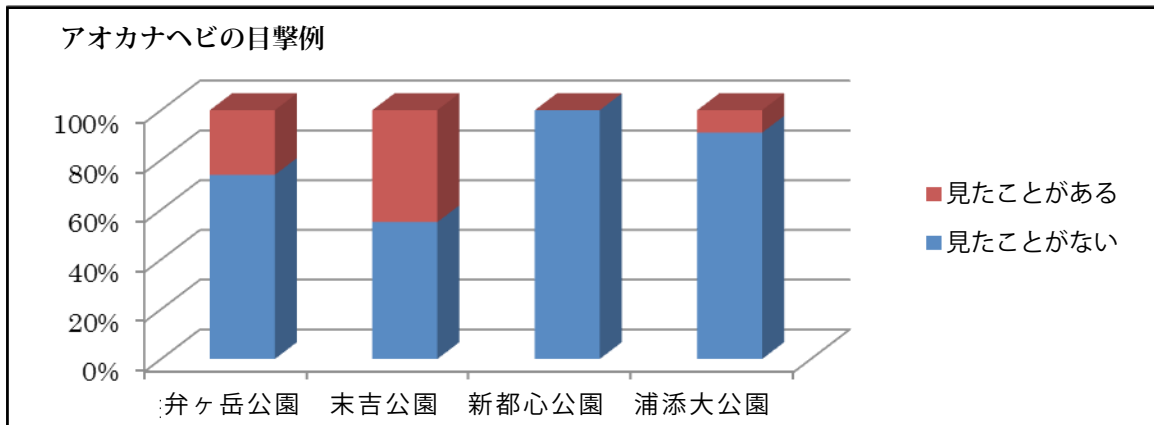
また、アンケートを実施した公園は弁ヶ岳公園・末吉公園・新都心公園・浦添大公園の 4 つである。

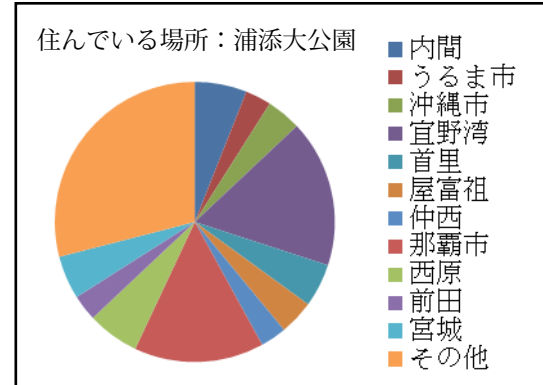
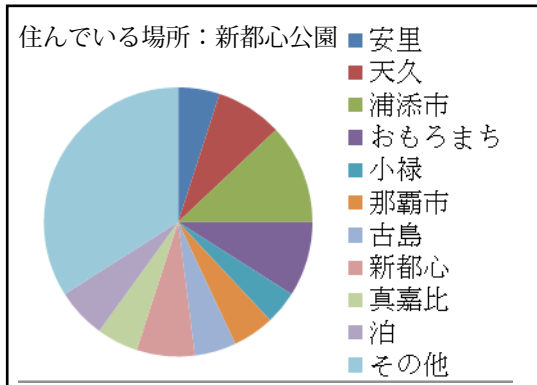
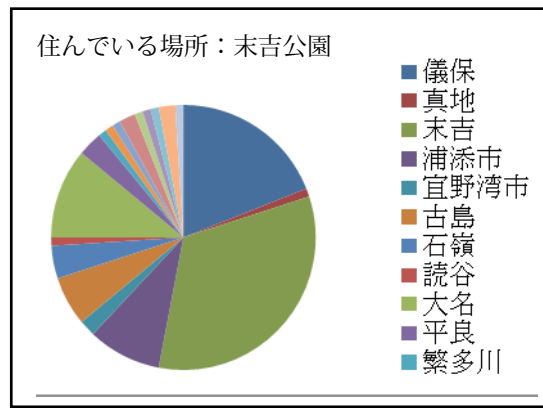
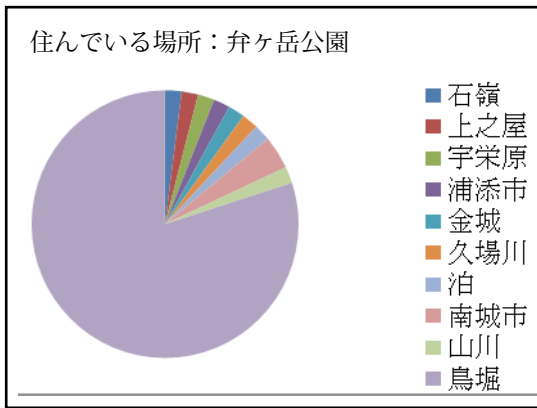
このアンケートによって得られるであろう成果は、アオカナヘビがいると思われる公園とそうでない公園の目撃率・利用者の平均年齢・利用頻度などを知ること、アオカナヘビが人と同じ場所を共有するための条件をしぼりだしたり、その公園に何度も訪れることによって

アオカナヘビが生息する場所の共通点を見出すこと、また生息地と非生息地の違いを知ることなどがあげられる。

3. 結果

①アンケートから、次のような結果が得られた。





②航空写真から次のようなことが読み取れた。

○国頭村字浜

昭和 20 年の写真は、ほとんど人の手が入っていない。しかし、現在は道が増え、道幅が広がっている、畑ができて、建物ができているなどのことから、沖縄本島内で一番緑豊かといえる国頭でさえ、人の影響で緑が減っているということが分かる。

○浦添市安波茶 3 丁目

昭和 20 年の写真は畑が多く木々が少ないのに対して、現在の写真は木々は多くなっているが畑がない。そして昭和 20 年の写真では見られなかった住宅が多いことから、人口が増えていると推測できる。

このことから、昭和 20 年と現在の写真からは木々は多くなっているが畑はなくなっていることが読み取れる。

○那覇市首里鳥堀町 4 丁目

昭和 20 年の写真では、住宅街や畑が首里の土地の大部分を占めており、特に広い範囲を占めているのは畑である。しかし、現在の写真では、畑がない。木々も増えていないので、畑だった土地はほぼ住宅街になったと考えられる。このことから、首里は昔から住宅街で、比較的人口が多かったが、現在では、さらに人口が多くなり、緑が減ったと推測できる。

4. 考察

航空写真からは、どこも数十年前と比べれば人為的な影響を受けていることがわかる。

またアンケート結果からアオカナヘビの目撃率とマンガースの目撃率が高い順が同じで、末吉公園、弁ヶ岳公園、浦添大公園、新都心公園の順になっているということがわかった。

これは、アオカナヘビが減少した原因のひとつであるという一説に反している。マンガースは本当にアオカナヘビの外敵なのか疑問に思う。しかし、アオカナヘビとマンガースの両者が同じ場所で目撃されているということは両者にとって住みやすい環境が類似しているのではないかと考えられる。

ここから、虫が住みやすい場所にはアオカナヘビも住みやすく、アオカナヘビが住みやすい場所にはマンガースも住みやすいと言える。これを紐解くと、虫がいない場所にはアオカナヘビもすめない。食料がないのだから当然だ。そして、前述の仮説から虫がいる場所には天敵であるマンガースもいる。食物連鎖が起きているわけである。この板挟みの状況からアオカナヘビは減っていったのではないかと考えられる。

では、アオカナヘビを今後増やしていくためにはどうするべきか。

マンガースがいる限り、アオカナヘビが今後増えていくのは難しいように感じる。

ならば、マンガースがいないところならばどうだろう。実際に、season I の活動で津堅島を訪れた時、アオカナヘビの目撃例はあった。ここから、虫はいるがマンガースはいないという状況、すなわち少し田舎の離島などでアオカナヘビを放せば、たとえ住宅街であれど着々と成体数は増えていくのではないだろうか。

今回の研究のテーマである“人とアオカナヘビが共存できる街づくりの提案”の答え、それはこの沖縄県に数多く点在する島々、そこに隠されていたのだ。

